

「さるべき業縁ごうえんのもよおせば、いかなるふるまいもすべし」

佐々木 元はじめ

昨年東北地方を襲った大震災は、日本全土を震撼しんかんさせ、多くの人々の身心に言い尽くせない苦悩を強い、悲惨な爪痕つめあとを残しました。しかし、ああした大惨事だいさんじの中にも、人間って何と尊いのだろうと深い感銘を受けた事も多くありました。

今年4月のNHKの番組で、震災から1年1ヶ月経った仮設住宅に住んでみえる家族の様子を、お母さんの話しで報道していました。3月11日当日、津波の届かなかった所で仕事をしていたお母さんを除いた、おじいさん、おばあさん、娘さんの3人家族に津波が襲ってきたそうです。津波が来ると言うので、早くおじいさんの車で避難しようとされたのですが、ダウン症と全盲のハンディを持った娘さんがパニック状態になって走り回り、車に乗ろうとしない。おばあさんがやっとの思いで掴つかまえ、暴れるその子を車に押し込んだ。もうその時には膝の辺まで水が来ていたそうです。車の中でも騒いで出ようとするので、外からドアを押さえていたおばあさんが、「早よう車出せ、アクセル踏め！」と叫ばれた。でもおばあさんを残して車を出せないで、おじいさんが躊躇ちゅうちよしていると、「早よう車出してくれえ」と何度も叫ばれるので、仕方なく少しずつ車を出した。バックミラーで見ると、腰の辺りまで水に浸かったおばあさんが「バンザイ、バンザイ、後ろを振り向くな、前を見て行け、バンザイ、バンザイ」と叫びながら津波に呑のまれていかれたそうです。本当に涙なくては見られない、計り知れない尊い話でした。

私は今まで『歎異抄なげにしよう』の「さるべき業縁ごうえんのもよおせば、いかなるふるまいもすべし」の「いかなるふるまい」の言葉を、悪い行為を成した時の事として受け止めていました。今回の大震災の極限状態の中で多くの方々のとられた、自己犠牲による崇高すうこうな行動は、『歎異抄』のあの言葉に対する私自身の理解の浅さを知らされ、その真実性を深く頷かされました。